

黙示録19章11-21節 「イエス・キリストの現れ」

1A まことの主権者 11-16

1B 白い馬による戦い 11-13

2B 激しい御怒り 14-16

2A 反逆者への裁き 17-21

1B 猛禽による宴会 17-18

2B 生きたままの地獄 19-21

本文

私たちの学びは、ついに黙示録 19 章の後半に来ました。ここが黙示録全体のクライマックスと言ってよいでしょう。黙示録の冒頭は、「イエス・キリストの黙示」であります。イエス・キリストの現れ、という意味です。これまで明らかにされていなかったものが、全開で明らかにされるということです。イエスご自身の来臨の栄光と力が現れるということです。

1A まことの主権者 11-16

1B 白い馬による戦い 11-13

11 また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実。」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。

「開かれた天を見た」とヨハネは言っています。今、ヨハネはおそらくは、天の御国の幻を見ているはずですが。バビロンが倒壊したのを、天で大歓声を上げている場面を彼は見ました。そして、小羊の婚宴の場面を見ました。相手は、きよい麻布の衣を着た花嫁、すなわち教会であります。そして御使いと話しているので、ここは天であります。しかし、その天の中に、さらに天が開けました。また異なる幻だったのでしょう。以前、ヨハネは同じように「天が開けた」幻を見ました。4 章 1 節、「天に一つの開いた門があった。」とあります。そしてヨハネは、「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」と呼ばれて、天にある神の御座の幻を見たのです。しかし今は、天に引き上げられるのではなく、その反対に、天が開けて、私たちの主イエス・キリストが地上に戻って来られるところを見えています。

そして、「白い馬がいる」とあります。私たちは既に、白い馬については黙示録 6 章で見えていました。その馬は、弓を持っていましたが矢を持っていませんでした。そして、冠を与えられていますが、それは競技選手の受けるような賞を得るような冠であり、王冠ではありません。そして、「勝利の上に勝利を得ようとして出て行った。」とあります。そして、その後で数々の災いが降りかかります。赤い馬が出てきました。戦争による火、血を流す赤色でした。そして黒い馬が出てきました。飢餓

による顔の色です。そして青ざめた色の馬が出て来て、それが死を示していました。ここから、患難が始まったのです。しかし私たちは、その白い馬がまさしく、偽キリスト、キリストに似せて非なるもの、反キリストであることを知りました。平和と言いながら、突如として破滅をもたらす者です。

しかし、こちらは本物です。私たちは、ゼカリヤ書 6 章で、馬と戦車が諸国の民に神の怒りを現わすために遣わされるのを見ました。「6:1-3 私が再び目を上げて見ると、なんと、四台の戦車が二つの山の間から出て来ていた。山は青銅の山であった。第一の戦車は赤い馬が、第二の戦車は黒い馬が、第三の戦車は白い馬が、第四の戦車はまだら毛の強い馬が引いていた。」そして、異邦の諸国に戦われて、「わたしの怒りを静める。(8 節)」とされています。これは、戦いのために先頭に立つ王、そして諸国を征服する王の姿であります。主は、罪や不義に対する怒りを示すために、権力を持つ者、力ある者、神とキリストの権威に反抗する者たちに対して戦われます。良い方を変えれば、主の権威に対して戦いを挑んでいる者たちに対して、力をもってそれを制する、やめさせるということです。

戦いというのは、どうして生まれるのか？ヤコブの手紙に書いてあります。「4:1-2 何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。」その欲望による戦争が、世の始まりの時に天において起こりました。サタンが、高ぶり神の権威に対して歯向かったからです。それで、黙示録 12 章にあるように、神は天使を遣わして、それら墮落した天使どもと戦わせるようにされました。こうやって戦いが天において始まりました。そして地上において、アダムが神の命令に従わず、反抗したのでエデンの園から追放されましたが、その子カインはアベルを殺しました。その暴虐は、カインの子孫に間に広がったので、それで主は洪水という力をもってその暴虐を消し去られました。そして、神は、ご自分の民を行かせないパロに対しても、十の災いをもって裁かれました。彼がイスラエルを奴隷としたいのも、欲望に現れです。このようにして、自分で欲しがっているところ、神の恵みによらないで欲するところには、争いや戦いが起こります。

そこで主は、これらの戦いを終結されるために戦われます。ペルガモにある教会に、バラムの教えを奉じている者たちがいたので、「悔い改めなさい」と言われました。けれども、「2:16 もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたがたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。」と言われました。悪や罪に対して、対話をすることはありません。エバは、蛇と対話したので、惑わされました。神の救いは、キリストの十字架に現れます。その十字架は、罪を死でもって罰し、また肉とその欲望を十字架という拷問と死に至らしめる手段によって殺すのです。改善するのではなく、殺してしまう、滅ぼしてしまうことによって義と平和をもたらします。それで、主は戦われるのです。聖書には数多く、「万軍の主」という名が出てきます。主は幾万もの聖なる御使いを連れて、戦わ

れる方だからです。

そして、主イエス・キリストの現れにおいて特徴的なのは、この方が様々な名によって呼ばれていることです。この方が呼ばれている名を見ていくだけでも、私たちはこの方に栄光と力に触れることができるでしょう。

初めに、「忠実また真実。」であります。偽りの白い馬、反キリストは、その逆と言って良かったでしょう。平和を約束しながら、それを裏切ります。その反対のことが起こります。契約を破る者と言ってよいかもしれません。力ある者は、しばしばこの裏切りを行なうし、しかし政治の世界であれば、これは絶えず起こっていることとすることができます。多くの人は、何かを期待して救いを求めるのですが、その救いが裏切られて生きています。しかし、まことの王、私たちの主イエスは裏切らない方です。3章 14節に、「アーメンである方、忠実で、真実な証人」という方としてラオデキヤの教会に対して現れていました。人は偽りの中に行きたいと願ってしまいます。その罪の性質のゆえ、自分たちの真実に触れられたくないと思います。しかし、福音はその隠れたはかりごとすべて明るみに出し、それでなおのこと、神がキリストにあって私たちをご自身に和解してくださるのです。ですから、反抗する軍隊に対して主は、真理をもって戦われます。

そして、主に期待して、この方に拠り頼んで来た者たちにとって、自分たちのための正しい裁きをしてくださるということで、忠実であり真実な方であります。「ヘブル 10:23 約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。」とヘブル書の著者は言いました。パウロも、困難に耐えているテモテに対して、主の栄光の現れをもって励ましました。「1テモテ 6:14-16 私たちの主イエス・キリストの現われの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。その現われを、神はご自分の良しとする時に示してください。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものであります。アーメン。」この方がこの姿で現れる時が必ずあります。主は忠実で真実な方ですから。

そして、「義をもってさばきをし、戦いをされる。」ということです。私たちは、これまで何度となく、復讐は神に任せなさいという教えを受けてきました。なぜなら、義をもって裁かれる方がおられるからです。私たち自身も、義をもって裁かれる方がおられることを思って、主を恐れかしこんで、地上で慎み深く生きることを勧められています(1ペテロ 1:17)。また、私たちは全てのことを知らないのだから、私たち自身は義ではなく、神のみが義なる方であるから、早まった裁きをしてはいけないことを戒められています。「あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。(1コリント 4:5)」

そしてそのようにして、平和が来ます。恒久の平和は、義と共に来ます。イザヤ書には、必ず正義が来て、それから平和が来ることが書かれています。義のないところには、平和はありません。ゼカリヤ書 7-8 章にも、正義が行なわれることを主は語られ、そして平和の種がまかれることを語られました。ヘブル書 12 章にも、「平安な義の実を結ばせませう」と書いてあるし(11 節)。ヤコブ書にも、「義の実を結ばせる種は、平和をつくる人にとって平和のうちに蒔かれます。(3:18)」とあります。義があつてこそその、平和です。ですから、エレミヤは何度となく、正義がないのに平和を言っている人々を咎めました。「6:14 彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。」罪を取り除くことなくして、傷は癒されません。ですから、罪への裁きを語らない言葉は、サタンからのものであり、偽の平和の使者であり、それが反キリストです。

12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。

主は、「燃える炎」の目を持っておられます。使徒ヨハネが初めに、イエス様の栄光の姿を見た時に、その目が燃える炎であつたことを述べています(1 章)。主は、全てのことをお見通しになる方であり、それにしたがつて公正に裁かれる方です。先に引用したコリント第一 4 章に、「主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。」とありましたね。主の前では、全て裸にされていて、全てのことについて神に申し開きしないといけません。

そして、「その頭には多くの王冠」があるといひます。ゼカリヤ書 6 章において、大祭司ヨシュアが複数の冠が重なっている冠をかむりました。キリストを示していたからです。これは、イエス様が王の王であられるということです。全ての王権、王たるもの、権威や権力、威光、富、位、これらのものを与えられている者たちが地上にいますが、それらの者たちを全て掌握され、支配しておられる王たちの王であられることを意味しています。全て、権威の与えられている者たちが、自分自身が天からの支配を受けていることを知る必要があります。奴隷を持っている主人に対してパウロは、「コロサイ 4:1 あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。」と言ひました。

そして、「ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた」とあります。名というのは聖書において、その人物の本質を示します。ですから、神の御名と言う時には、神の本質、その名誉、あらゆる尊厳がそこに含まれています。ですから、神の御名をほめたたえようと、神をほめたたえようという言い方だけでなく、使われているのです。そこで、イエス様には、「それゆゑ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。(ピリピ 2:9)」と言われているのです。その中で、誰にも知られない名があるというのは、私たちの思いをはるかに超えて、不思議なことをされる名ということでしょう。イエス様は不思議な助言者と呼ばれています(イザヤ 9 章)。

13 その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。

ここにおいて、「血」は罪の贖いのための流されたものではありません。これは、返り血です。イザヤ書にその預言の背景が書かれています。「63:1-4「エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもって進んで来るこの者は。」「正義を語り、救うに力強い者、それがわたした。」「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。それで、彼らの血のしたたりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。わたしの心のうちに復讐の日があり、わたしの贖いの年が来たからだ。」ご自分に反抗し、戦いを挑む者たちに対して主は、戦われます。そして踏みつけられます。その返り血を浴びて、その衣が真っ赤になったのです。

私たちは、ここで復讐の日、贖いの年という言葉が並んでいることに注目しないといけません。主は、血を流した者は血を流すことによって裁かれることを定めておられます。目には目、歯には歯、そして命には命です。主が、そのようにして血を流す者たちに対して血をもって戦われます。これによって、主は贖いを果たされるのです。それは、血を流された者たち、不正に殺された者たち、虐げられた者たちに対する復讐によって、彼らに報いてくださいます。敵を打ち滅ぼすことによって、神は救ってくださいます。ですから、これは贖いなのです。

そして、イエス様は一体誰なのか？どなたなのかということは、「その名は「神のことば」と呼ばれた」というところに現れています。「ヘブル 1:1-2 神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。」神が語っておられたけれども、今は、神の栄光の輝き、完全な本質の現れとしてイエス様が来られたので、この方が神のことばなのです。ヨハネは、そこで、「ヨハネ 1:1-2 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」と言いました。主は、物理的な武器を使って敵に戦われるわけではありません。神の言葉によって戦われます。イエス様は、天地は過ぎ去っても、ご自分のことばは決して過ぎ去らないことを語られました。神のことば、イエス様のことばそのものが、あらゆる問題に対して戦う武器なのです。

2B 激しい御怒り 14-16

14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。

この「天にある軍勢」とはだれのことでしょうか？8節です、「花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。」この軍勢とは教会のことです。私たちは大患難の前に引き上げられ、

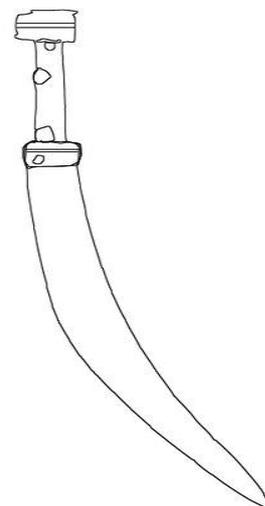
小羊との婚姻を経て、主とともにこの地上に戻ってきます。ユダの手紙には、「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。(14 節)」とあります。そして聖書には、聖徒たちの他に天使たちも戻ってくる事が書かれています。第二テサロニケ 1 章 7 節に、「主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われる」とあります。主が聖なる者たちと戻ってこられます。聖なる御使いと共に戻って来られ、また聖徒たちと共に戻ってこられます。

キリスト者になるということは、キリストに結ばれた者となることです。ですから、キリストに死にあずかり、キリストと共に葬られ、そしてキリストと共によみがえりました。私たちは水のバプテスマによってその決断を表明します。それから、キリストは天に昇られました。ですから、私たちもキリストが天から降りてこられた時に、天に引き上げられます。そして栄光の体を受けます。主の二姿に変えられます。そして、その小羊との婚宴があるのです。そして主が栄光の姿で戻って来られる時に、私たちも栄光をもって現れるのです。「コロサイ 3:4 私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。」

そして、「白い馬に乗って彼につき従った」とありますね。付き従うだけで、戦いません。主がひとりで戦われるからです。「イザヤ 63:5-6 わたしは見回したが、だれも助ける者はなく、いぶかったが、だれもささえる者はいなかった。そこで、わたしの腕で救いをもたらし、わたしの憤りを、わたしのささえとした。わたしは、怒って国々の民を踏みつけ、憤って彼らを踏みつぶし、彼らの血のしたたりを地に流した。」そう、主ご自身のみが救いをもたらします。私たちが主を助けることもなく、そんなことはできませんでした、主ご自身が戦われるのです。ここに、私たちキリスト者が、間違っても主を助けようとする動きがいかに間違っているかを知るべきです。

15 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。

主はみことばによって諸国の軍隊を打ちます。ここの「剣」のギリシヤ語は、バルカン半島のトラキア人の使っている、非常に長い剣のことです。メシヤについての預言で、主が口をもって戦われることが書いてあります。「イザヤ 11:4 正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。」今、初めに来られた主は、地上においてこの剣を隠しておられました。「49:2-3 主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し、私をどぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。そして、私に仰せられた。「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現わす。」イエス様の言葉は、へりくだった言葉、柔和な言葉でありましたが、そこには塩がきいていたのはそのためです。心が刺されるようでもあります、私たちが滅ぼされることはありません。それは、矢筒の中にご自身の剣を隠し



ておられたからです。しかし、その言葉を完全にふるまわれるのが、終わりの日です。

そして、主が神の御国の王となられるとき、この方は牧者のように世界を支配されます。むちあるいは杖は、過ちを正す時に使われます。「1コリント 4:21 あなたがたはどちらを望むのですか。私はあなたがたのところへむちを持って行きましょうか。それとも、愛と優しい心で行きましょうか。」とパウロは、コリント人を戒めるために話しました。ここでは、鉄の杖です。反逆する者に対しては、容赦なく打つために用いられます。神の国において、反逆する者たちはイエス様の力によって滅ぼされます。詩篇二篇 9 節に、「あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼く物の器のように粉々にする。」とあります。不正や不義を行なう者どもには、容赦ない制裁をもって対処され、正義と平和を確立されるのです。

そして、「万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。」と言われます。これも、黙示録の中で出てきました。「14:18-20 すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言った。「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。」そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。」主は、力ない弱い方ではありません。主は、力をもって憐れまれます。神の憐れみには力があります。主が弱くなられて、十字架に付けられた時でさえ、太陽は暗くなり、地震が起こり、その場はすべてご自身が掌握されていました。しかし、主の忍耐を軽んじている者たちには、このように容赦ない裁きを下すのです。

16 その着物にも、ももにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。

ここの「王の王、主の主」のギリシヤ語は、王も主も大文字になっています。英語では、すべて大文字で LORD OF LORS, KING OF KINGS となっています。主の栄光の完全な現われです。ここで分かるように、反抗する諸国の王たちと対等に戦わるのではありません。完全に、ご自分に従属している者たちであるはずなのが、反抗して戦いに挑んでいるのですから、勝ち負けではなく、ただ愚かの一言に尽きます。主はこのような形で、全世界に対してご自身が王の王、主の主であることを明らかにされます。すべて隠れたことは、明らかにされます。主は、すべてを公正に裁いてくださいます。

2A 反逆者への裁き 17-21

1B 猛禽による宴会 17-18

17 また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり、18 王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬と

それに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」

ハルマゲドンの戦いの最終段階です。「太陽の中にひとりの御使い」が立っています。イエス様が1章16節で、太陽のように輝いていましたが、この御使いがその栄光を反映しています。そして、御使いが全ての鳥に命じます。小さい者、大きい者、自由人と奴隷、すべてというところに無差別だということです。神のさばきは、それを免れるものはいません。王から軍人、馬、すべて残らずということです。イエス様はこのことを、既に弟子たちにお語りになっていました。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」とあります(ルカ 17:37)。

聖書では、肉を食べるといのは、神のさばきを示す描写として出てきます。人々は死んだら、それを丁重に葬ります。それがその人の尊厳を表していました。ですから、死んだ後に死体が放置されている、しかも鳥に食われるというの、もっとも卑しめられている状態です。エレミヤ書において、神のさばきが現れる時に、「エレミヤ 7:33 この民のしかばねは、空の鳥、地の獣のえじきとなるが、これを追い払う者もない。」とあります。そして、ゴグの戦いにおいても、彼らが鳥の餌食になる裁きがエゼキエル書 39 章 17 節に書かれています。

そして、なぜここが「神の大宴会」と呼ばれるのか？それは、先ほどの「小羊の婚宴」と比較されているからです。主の婚宴に招かれているのか、それとも神の大宴会に招かれているのか？ということでもあります。

2B 生きたままの地獄 19-21

19 また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。

黙示録では、まずバビロンに対する裁きが書かれていました。獣と他の王たちが、女を憎みそれを倒しました。それも、神ご自身が意図されていたことでした。宗教的バビロンは倒れました。そして商業的バビロンは、大地震によって倒壊します。獣は既に神のようになっており、そのように拝まれていました。けれども、商業バビロンまでが倒されます。最後に彼らはハルマゲドンに集結して、そして最後の戦いを行なうのです。

そしてこれが、最後の場面です。世界中から集まってきた諸国の軍隊は、バビロンを倒し、それから反キリスト軍と、それに対抗する軍とが交戦し、そしてボツラ、あるいはペトラにいるユダヤ人たちが滅ぼそうと相集まりますが、そのときにイエスさまが戻ってこられます。その戦いはエルサレムのほうに移り、エルサレムの住民は自分を助けてくださるメシヤは、かつて十字架につけたナザレ人イエスであることを知り、悔い改めます。そして世界の軍隊に対して主は鉄槌を加えられ、一気に滅ぼされます。主はオリーブ山に立たれて、そのとき地殻変動と天変地異が起こります。神

の国が建てられる準備ができました。そして、主は国々をさばかれて、ある者は永遠の地獄に、またある者は御国の中に入れられます。そして、主はエルサレムから世界を君臨されます。

20 すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。

世界を惑わし、荒廃へと至らせた反キリストと、反キリストを拝むように仕向けた偽預言者は、ここでさばきを受けます。生きたままゲヘナの中に投げ込まれます。覚えていますか、13 章にて反キリストは、「だれがこの獣に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう。(4 節)」と世界中の人からあがめられました。しかし主の前では、このようにイチコロなのです！そして、「硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた」とあります。生きたままというのは、神の怒りの激しさを物語っています。反抗した者に対して、それを扇動したものに対する裁きです。コラの反乱を思い出してください、彼らは生きたまま地面が割れて、陰府に突き落とされました。

21 残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。

残りの者たちは、ゲヘナではなくこのように、死体が鳥によって喰われるという裁きを受けます。そして 20 章では、悪魔が底知れぬ所につながる話が出てきます。千年後に解放され、今度は悪魔自身が、ゲヘナに投げ込まれる話が出てきます。

このようにして、主は悪に対して裁かれます。今は、心の中で神に反抗しているのか、従順なのが隠されていますが、それがやがて、全世界的にはっきりと現れる時が来ます。